九月十五日に奉天を出発して、ここに着いたのが十一月四日、実に五十日近いシベリア抑留への長い長い道程であった。

シベリア抑留記

新潟県　若月　太郎兵衛

ソ連人について

人なつっこく純朴で、親切ですぐ仲よしになれる人がほとんどでした。物事にあまり頓着しないおおらかな面は我々島国根性と対照的です。見習うべきだと思いました。中には悪い人もいました。それは言葉が通じないため、理解できずガミガミ怒声を張り上げるといったたぐいのものでした。日本人を理解することで逆に尊敬する者もありました。

みな人間は同じなんです。彼らはドイツとの戦いでひどい目に遭いました。戦争はこりごりだ、平和を望む心は人一倍強いと思いました。社会主義の下では、国がすべて最低生活ではあるけれど保障してくれます。生まれてから墓場まで、子育て、教育「無償」、就職、年金「無拠出」、病気「無料」、住宅「ただ同然の低家賃」、税金「ほとんどない」、バス汽車賃「ほんの少し」、結婚「自由人種も含めて」、明日の心配は要らない。以上のような仕組みになっているため、極めてのんきムードになってしまう。せかせかしなくても暮らしていける。我々がノルマをあげるのに頑張っているのに、彼らはついて行かれないから、ゆっくりやれとブレーキをかける。まるで反対現象なのです。監督に怒られない程度にやっているのがコツなんだって。考えない、動かない、しゃべらない、なんです。福祉の面はすばらしい先進的なものです。生産の面ではよいアイデアも生まれて来ません。何でも政府まかせ、生産も上がらない。

政府は人民のエネルギーをあらゆる面に燃え立たせる政策をやらず、もっぱら権力にしがみつくことばかりに終始してきたのだと思います。

彼らは日常のざれごとやいたずら話は大いにはしゃ

ぎます。いざ政治に関しての話になると口を閉ざします。ヤア、ニズナーュ「私は知りません。わかりません。」

黒パンとサルダート（兵隊）

黒パンはソ連人の主食である。原料は大麦によく似たライ麦と聞かされた。それを七〇%ぐらいに精白して製粉したものを使用してつくるのだ。繊維も多くビタミン類も失われず、升目も歩どまり多く食糧不足をカバーできるメリットがあるからだ。百二十グラムの粉で三百グラムのパンができるのだ。つまり百八十グラムが水である。味は酸っぱくて独特の香りがする。なれないうちは決してうまいものではない。それでも他に食べるものがあるわけでもなし、お腹がすいてくれば何を食べてもおいしいものになるのである。香ばしいパンの香りは食欲をそそるのである。パンは一食三百グラムは決まりである。バーム収容所では昼食に出た携行食として便利だからだ。従ってパンの分配は夕食後寝るまでの間にやっていた。夕食を済ました兵士たちは、それぞれの寝台の上に上がって、班内の中央で当番兵がパンを分配するのをまばたきもせず、じっと公平か見守るのである。どうしても正確にはできぬので、彌次郎兵衛はかりをつくった。水平はかりである。どんな少しの切れ端でも、どんなに細かく刻んでも百%皆の納得いくところまで精密に分配しなければならないのである。

パンのつくり方について

パン工場。れんがづくりで、窯の構造はパン型の差し込む平面が五~六畳以上もあり、そこにまきを入れて火をたくのである。どんどん火を燃して窯の中を真っ赤にするまで燃やすのである。真っ赤になるとたきおきを全部速やかにかき出し、パン型に入れた生パンをどんどん差し入れるのである。あらかじめ醗酵させた練り物なのである。入れ終わると速やかに粘土でたき口や煙突の出口などを密閉するのである。二、三時間もそのままにしておくと香ばしい香りがして出来上がりとなるのである。

パンの種類は黒パンばかりではない。白い良質のパンも金さえ出せば買えるのである。我々は一文なしで

買うことはできないのであった。

捕虜の悲しさ、無念さは言葉では言い尽くされない。経験したものでなければ理解できないのである。

シラミと南京虫との戦い

シラミや南京虫と言われても、現在の日本ではお目にかかることもできない。シラミは成虫で二ミリぐらい、透明な白い虫で、足は数えたこともないのではっきり言えないけれど、八本ぐらいあると思う。人間の血を吸うと全体が真っ赤になるのである。乾燥した大陸に多く発生している。最も不潔な人体が好みのようだ。風呂に入らないで何か月も着のみ着のままでいれば必ずシラミはわいてくるのである。栄養失調になっていても遠慮はしない。がむしゃらに食いついてくる。繁殖力の旺盛なことは想像以上だ。肋骨が出て洗濯板や湯たんぽのようになっているのに食いついてくる。夜も眠れない。昼は四六時中わさわさかゆくて仕事もできぬ。

就寝中無意識にぽりぽりと体をかくと、爪に五、六匹もの血を分けた兄弟が引っかかってくる。まさにこの世の地獄だ。シラミは一番怖いのは発疹チフスの媒介をやるからだ。これにやられてモロドエの収容所では一週間で二百七十人も亡くなっているのである。

風呂も水もない。炊事用の水だけは池や湖の氷を割って穴を開け、バケツで汲み上げ、馬車のタンクに運ぶのである。各自の洗たくは飯盒に雪を持ってきてペーチカの上で暖め溶かし、湯をわかしその湯で洗たく、洗面をやるのである。半年に一度ぐらいよその部落までバーニャ（浴場）に行くのである。

南京虫にも参った。南京虫も血を吸わないと透明で白い柔らかな虫で、血を吸うと赤くなって目につく。幼虫は小さくてよく見ないとわからないくらいだ。成虫で三ミリくらいになる。こいつはシラミのように体全体を食うわけではない。手首とか首の周り、露出した部分だけ食うのである。かゆさもシラミとは違い、痛がゆいというか、なんともいえないかゆさ、後からだんだんかゆさが増してくる。我慢できずかいているとはれ上がり、じくじくと汗が出てくるのである。つかまえて潰すと、異様な臭気が鼻をつくのである。

南京虫も好きなものと嫌いな人がいるようだ。これははなはだ不公平であった。私は南京虫にほれられてほどほどに参った。やつは日陰回りしてやってくるのである。先輩の星野さんは嫌われて本当に幸せであった。なんで私だけが食われなければならぬの。

食糧事情はひどかった

黒パンのことでは前述のごとく一日三百グラム。一食あとの二食は雑穀入りのスープ程度のもので、飯盒のふたに一杯、目玉が写るので目玉汁と言った。雑穀の多いときでカーシャ（おかゆ）のようなものでした。たまにアメリカ産の鯨の脂肉がおまじないぐらい入っていれば天国でした。ポークソーセージもたまに入っていました。これもアメリカ産でした。アメリカは日本と戦いながらソ連にも援助していたのには驚きでした。さすがは物量を誇るアメリカだなと恐れ入った次第です。そればかりではありません。ソ連軍のベーカートラック、ジープ、鉄道の機関車はフィラデルヒヤのフランクリン工場でのものでした。小麦粉もアメリカのものです。

話はもとへ戻します。食糧は、当時ソ連もドイツとの戦いで国の経済力の七〇％を破壊され、貧乏のどん底にあえいでいました。子供たちは着るものもなく親たちの服を着て下はズボンもありませんでした。はだしで気の毒そのものでした。駅に我々の食糧が入ると子供たちは腰をひもや縄で縛ってたくさん寄ってきます。兄弟して協力し食糧の落ちこぼれを懐へ、または背中からどんどん砂混じりまで入れるのです。それも零下三十度、冷たい氷のような落ちこぼれを、かわいそうで見ていられないくらいでした。それを母親のところへ持っていって、母親はどうして食べ物につくってくれるのかな。首をかしげたくなりました。本当に貧乏のどん底だったのです。母親たちは凍った畑へ馬鈴薯の掘り残しを探し求めて、小さなバケツに猿の小便と言われるアンモニア臭い芋を拾って来るのです。戦勝国の人々の困窮ぶり言語に絶するものでした。

ラーゲル生活は絶望的な悲惨なものでした。いつ帰られるか全然わからない。聞けばスコーラ、ダモイ（早いうちに帰られる）の言葉だけ、寒さは極限に達し、

零下七十度日中で零下三十度、風が吹けば体感温度は何倍も冷たくなる。最初は電気もなく、松やにを採ってきて小缶に明かりをつくった。夕食後は手袋や靴下などのつくろい、糸はないから軍足をほぐして糸をつくり裁縫である。朝起きてお互いの顔を見合わせて大笑い、まつ毛や鼻毛にすすがぶら下がって真っ黒け、自分の顔は見えないからわからない、相手の顔だけ見ておたがいさまと気づき、話の種がまた一つ。気のきいたつもりで灯油かと思ってガレージから油を少し失敬してインク瓶に詰め、明かりにしようと火をつけた途端に爆発して、寝台の上は大火事になった。油は灯油ではなくベンジンだった。もう少しで大火事になろうとした。皆落ち着き払っている者ばかりなので、慌てず毛布をかぶせ消しとめた。やがて電灯がつけられたので、皆はやれやれというところ。発電所はれんが工場のもので、蒸気機関車のスクラップを利用してダイナモを回転させて、二百ボルトの電力を供給するものだ。

ある組は、松林から六、七メートルくらいの松杭を切って運んできた。ラーゲル周りに三重の鉄条網をつくるのだ。我々はスコーラ、ダモイなのだから、これは多分ドイツの捕虜でも来るのだろう。自分たちのためのものだとは信じられなかった。お人好しの楽観主義者だった。

いよいよ工場の復旧工事が始まり、並行してれんがの製造も始まった。粘土の掘削は凍ってしまってバールもツルハシも受け付けない。仕方なく電柱のような大きな木材を燃やして一日がかりでも、ほんのわずか一斗か二斗ぐらいしか掘れない。ジレクトル、ザオーダ（工場長）は飯にもかゆにもならぬとかんかんに怒っている。だって我々のせいではない、自然条件なんだからしかたないだろう。それが気に食わぬなら早く我々を日本に帰せばよいのだ。我々は何も頼んで使ってくれなどと言っていない。迷惑なのはこっちのほうだ。やりきれない気持ちであった。そのうちにだんだん糧秣もなくなってきた。小豆が出始めるとなくなるまで小豆ばっかり、コウリャンが出てくるとそれがなくなるまで。こっちは迷惑もはなはだしい、そんなこ

とで先が思いやられるのであった。いよいよ糧秣も来る来ると言っているけれど、一向に入ってこない。

政治部員の決断

とうとう糧秣は事切れた。倉庫の床板をはがして縁の下のおちこぼれをかき集めて、炊事してくれた。臭くてとても食べられたものではない。土臭いかび臭い、だれも食べなかった。我々は餓死しなければならぬのか。外には草木も何もない。荒涼とした凍土のみ。絶食である。それでも朝八時になればお構いなしに出勤のサイレンが鳴る。皆ふらふらだ、一体どうなるのだろうか。政治部員は決断した。来春用の貯蔵種馬鈴薯を放出してくれたのである。来年のことより現在が大変なんだ。放出といってもたらふく食べられるほどのものではない。塩水スープの中へ芋が二、三切れ入っている程度のもので、どうにもならぬ。黒パンだけが命つなぎなんだ。

そのころソ連人も一週間も何もなかった。我々より苦労したと聞かされた。ウクライナ産のもみが入ってきた。我々は死にかかっていたときだけに、思わず万歳を叫んだ。もう死ななくてもよい。体じゅう力がわいてきた。しかしもみでは、鶏ではあるまいしどうしたら食べられるか、考えた。よくしたもので五百人の中には土臼をつくった経験者がいた。粘土に岩塩を粉にして混ぜながら練るのである。堅めに目木はシラカバの木を割ってはめ込むのである。臼は乾燥馬鈴薯の入ったベニヤで側をつくって出来上がり。使役の者数人でもみすりだ。まあ、何とかなりそうだ。ぜいたくは言っておられる場合ではない。もみすりは何とかできたけれど、唐箕（とうみ）がない。仕方なくベニヤで間に合わせの箕（み）をつくり選別をした。箕でふってもみ殻を吹きながら選別するのである。米にはなったけれど玄米である。一升ビンに入れて棒でついても容易なことではない。結局は玄米飯を炊くことになった。とにかく米の飯にありついた喜びは言葉では表現できない。そこへもう一つうれしいことは、たる詰めの大型ニシンが半分ずつ食べられることになった。玄米飯はもみも入っているので、左手のひらはもみ受けといった感じ。おいしかった。飯盒のふたに一杯の

玄米飯そしてニシン。忘れられない思い出の一つです。そのまま食べるのがもったいないと言って飯盒いっぱいに水を足してかゆにして食べ、満腹感を味わうという人もあった。皆食べ終わって横になっているのに、後からゆっくり楽しみながら時間をかけて舌打ちしながらやっているので、はた迷惑というところ。早く終わった者は音を聞くたびお腹の虫が鳴り出すのである。

無精白のアワで糞づまり、五百人が砲列、政治部員の驚き

またしても糧秣が不足してきた。小豆、コウリャン、大豆、米、アワ、何でも一色ずつくれるのである。アワ飯が飯盒のふたに一杯ぐらいずつ上がってきた。食べてみるとジャキジャキする。他に食べるものがないので、皆は我慢して食べたのである。ところが、翌朝出動前になったら医務室が満員、何事かと行ってみて驚いた。強烈な便秘患者でうなっている。浣腸器が足りぬ。浣腸やっても出ない。極めて重症である。見ていたら自分ももじもじしてきた。大変なことになったのである。ドクターの話によれば、アワの皮には強烈なタンニンが含有されている。そのタンニン「渋」が腸粘膜を固めてしまって内容物が動けなくなったためと聞かされた。精白しないアワは食べられないものとなっている。非常識もはなはだしいとのことであった。お腹はバンバン張ってくる。出そうで出ない。我慢できずに指で掘り出している者。棒切れで恐る恐るほじくっている者。便所に広場に工場の陰に、もう作業どころではない。こちらは命がけで、糞掘り作業だ。うんうんの呻き声。どうなることかと思った。

八時過ぎ政治部員がやって来た。砲列をしいてのしかめづら、うめき。ポチムどうしたのだ。通訳に説明を受け初めて理解したのである。その足ですぐ炊事場へ行って事情を確かめたのである。アワは精白工場へ持っていって、完全なものにしてから食べさせることにした。二、三日お尻がひりひりして困った。アワで泡を食ったお話、笑うに笑われないような糞のことでした。

こんな作業をやりました。四年半

バーム収容所ではれんが工場、粘土の掘削作業、工場の修復工事、れんがの製造、生れんがの運搬、乾燥室での自然乾燥、乾燥したれんがをペーチカ（窯）に積み込む作業、カマドの火たき、製品の貨車積み、伐採、れんがペーチカにたくまきにする落葉松林の伐採、軽便鉄道の路線の建築、自隊まきの採取、木材の貨車積み込み作業。

チタ収容所では筏流し、石灰山の石灰岩の釜入れ積み込み、チタ駅の雑役石炭灰の処理、機関車の廃水の氷割り処理、第三れんが工場の粘土の掘削、製造、運搬、鉄道局建設の足場づくり、同建設の左官の研修、ミヤソコンビナート（屠殺場、ソーセージ工場）の作業、シラカバ林の伐採、木材の貨車積み込み作業。

コムソモリスク収容所では労働者アパートの建設

ナホトカ終結地では雑役など

以上が記憶にある作業の種類であります。

一番苦労だったのは、何といっても粘土の掘削です。次は伐採です。伐採は二人引き鋸で相手と呼吸が合わないと全然切れないのです。粘土は凍って一枚板のように歯が立たないのです。解けた粘土は粘ってスコップから離れないのです。日本のような使いやすい工具であればまた別です。量ばかりの生産でろくなものがないのがソ連の現状でした。二人引き鋸一つみても、ドイツ製は鋼で切れ味抜群。ソ連のものは生金で灰ならしに等しい。よい仕事はできるはずはありません。量もいいけれど質のよいものでなければ、骨折り損のくたびれもうけ、労働者は浮かばれません。当時のソ連では、わかっていてもそれは無理だったと思えます。我々は重労働と言っているけど、お腹いっぱい白い飯を食べていれば重労働の部ではありません。年から年じゅうすき腹で栄養がとれていないから、何をやっても苦労なのです。

ソ連は働かざるもの食うべからず。けれど、この文源は搾取を許さないという意味で労働とは関係ないのです。ただノルマ制度で賃金を出来高払いを基本にしていますので、働きの悪い人はそれによって計算され賃金が支払われます。賃金は国立銀行に振り込まれます。必要に応じて各自銀行より払い下げて生活してい

るのです。

どんな企業でも、鉄道引き込み

れんが工場でも製材場でも屠殺場でも都市建設でも、ことごとく鉄道を百%利用している。それにしても当時としては徹底した合理主義だなと感心したのである。自動車の少ない時代のことである。バームは鉄道省の系列で、チタ第三れんが工場はチタ市の系列、それぞれ系列があるのである。バームれんが工場の年間生産割り当ては百五十万枚だそうだ。チタ第三れんが工場は年間は聞いていないけれど、一日の生産ノルマのレコードは八千五百枚だった。シベリアはどこへ行っても粘土と砂の適度に混じった土質なので、れんがはどこにでもつくれるのだ。ただし燃料の森林が近くにあればの話である。

ミヤソコンビナート（肉）屠殺場のことである。仕事の期間は八月から十二月まで二十四時間操業二交替で、牛の場合は昼勤で六百頭、夜勤で六百頭、計千二百頭がノルマである。全部分業式で流れ作業である。貨車でどんどん運んでくる牛を、八時間で六百頭も屠殺し解体し皮をはぎ内臓を処理し皮は塩をぬり、皮革工場へと貨車積み、内臓は分類され、ソーセージに食糧に、血液は蒸気でむし固まったものをダンボール箱に詰めて、内臓についている脂の類は、蒸気窯で熱し透明に澄んだ脂を汲み取り、ダンボール箱に入れて食糧や石けん工場へと送られていくのである。牛は満州物は脂がのっていて素晴らしい肉であった。かたやシベリア物はろくに食べ物もなく谷地坊主の草しか食べていないのでやせた牛ばかりであった。もちろん豚はごく稀で、二番目は綿羊であった。綿羊はノルマは牛の倍。一日に千二百頭（八時間）当たりで処理される。ソーセージもつくっていた。腸詰めである。腸を水道の蛇口につなぎ、石灰水のようなものでもみながら洗浄して、その中へいろいろ肉や卵やニンニクなど調味料を加えて詰め込み、燻製室につるして、下で火をたきながら仕上げるのである。ミヤソコンビナートにはもちろんビルのような大きな冷蔵室がある。肉の種類別、等級別に、また燻製品と部屋が分かれている。

工場専用の発電所もある。カルピチ（窃盗）が多い

し、囚人を使っているので、鉄条網が三重に張られ我々の収容所と変わりない。それでもカルピチは防げないのだ。監視兵と組んで彼らは結構うまく（窃盗）を続けて、金もうけをやっているのだ。

伐採の作業について。星野さんとともにバームではれんが工場の釜にたく燃料用のまきである。原生林の落葉松林、目通り三十～五十センチくらいの大木を切り倒し、一メートルの長さに切ってそれを一メートルの高さに積み上げて一立米、二人一組で六立米が一〇〇%である。切って枝打ちして玉切りして積み上げ、検収をしてもらって終わりとなる。普通お腹いっぱい食べての健康体であれば、そんなにきついものではない。ふらふらで松の小枝にでもつまづき倒れるような、生けるしかばねの捕虜では至難の労働である。重労働と言われるゆえんはまさにそこにあるのである。作業の隘路は何よりもピラー（二人引き鋸）の粗悪さである。生金の大量生産の代物で、我々は灰ナラシと言っていた。鑢（ヤスリ）もお粗末、目立ても素人の我流でやらざるを得ない。切れ味の悪いことおびただしい。また重要なのは、相棒と呼吸が合わないとどうにもならぬ。相手が引くときは押してやる。こちらが引くときは相手が押してくれる。お互い引っ張り合っているようでは仕事にならぬ。私と先輩星野さんはいつも組んでやった。他の人ではどうしても呼吸が合わないのである。二人して一本の木の元切りを二日もかかってやっと切り倒したこともある。大きい木でした。目どおり八十センチくらいの大木でした。回り切りでやっとでした。倒したときは万歳を叫びました。

星野さんも私も昼食はないのです。前の晩に上がった携行食のパンをもらうとすぐ食べてしまうことにしたのです。あすはあすの風が吹く、その場で食べずに取っておくと、盗まれてなくなるのです。お腹に入れてしまえばだれもとることはできません。安心してよく眠れるのです。翌朝になると枕もとのパンがなくなったと言って泣き面をかく、そしたらパン袋が廊下に投げ捨ててあった。もちろん中は空っぽでした。昼は雪を空飯盒に詰めてたき火に暖め溶かし、そのお湯を

飲んで過ごしました。もう精神力です。我慢です。忍の心です。慌てません。なるようにしかならぬ。悲観はしない。楽観主義です。歌の文句ではないけれど、河の流れのように、明日のことは考えない、朝死んでいるかもしれぬ。生きていたらもうけもんだ。過ぎた苦労は忘れることだ。いつ死んでも悔いはない。余計なことは一切考えないことだ。むだなエネルギーを消耗しないこと。それで私たちは他の人たちよりやせなかった。いつでも月例身体検査は一級であった。強い丈夫な体を生んでくれた親に感謝しました。

先輩、星野廣高さん。信頼されるゆえん

ずばり欲のない人で象徴されましょう。どんなに苦しくても泣き言を言わない。いつでもでんと構えて動じない。分け隔てなくだれとも友達になる。決して自慢はしない。不正義に対しては断固妥協せず、戦っていく。まさに我々男だったら、ほれるのも無理はない、すばらしい先輩です。先輩は武術に学術において、下士官教習所（関東軍）ナンバーワンの方で、関東軍司令官より賞詞を頂いた秀才であります。私は師団司令部へ配属になってからは部屋も別でしたけど、バームでは枕を並べての戦友でした。シラミに食われたり、南京虫に食われたり、生死をともに誓った仲でした。私ばっかり南京虫にほれられて苦しんでいるのに、先輩は全然平気なのです。虫は先輩をもったいなくて食わなかったようです。これだけは不公平でした。前文にも書いたとおり、私が衣類を盗まれて裸になったときも、衣服を脱いでこれを着れよと、死ぬときは一緒だ、ともに生きるんだ。この一声は一生忘れ得ぬ感銘であります。先輩とはバームで二年くらいでお別れとなりました。先輩は三百人の長として幾多の苦難を経て帰還されたそうです。

私の虜囚小説

栃木県　岩崎弘一

昭和十九年十一月末の朝鮮海峡は、牙をむき出しにして荒れ狂い、十メートルを超す波浪が北支派遣軍要